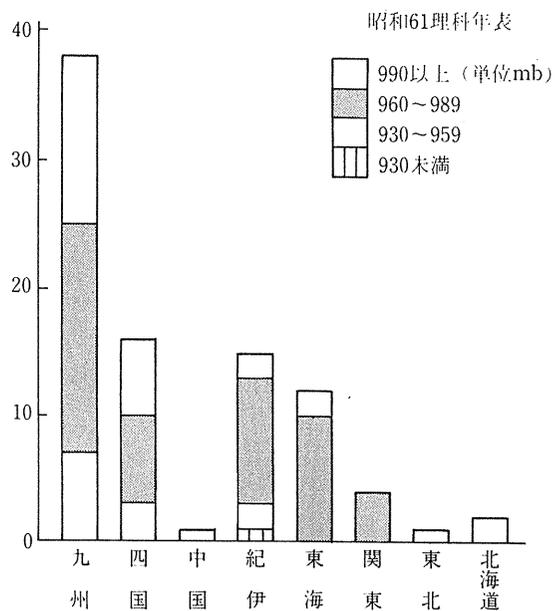


(表1) 地域別台風上陸数(1951年~1980年)



# 第三章 自然災害

## 第一節 風水害

日本の年間降水量の三〇〜五〇%は、台風と梅雨によるものといわれ、また台風が日本を縦断したときに、全国に降らせる総降水量は三〇〇〜六〇〇億リともいわれている。台風は日本の水資源に大きな役割を果たしている反面、暴風や豪雨による被害が大きい。

表1からもわかるように、四国地方は、九州について台風上陸数が多い。当市においても大きな被害を受けている。以下、江戸時代以降の当地域の主な被害をあげる。

一六六六(寛文六)年「前代未聞ノ洪水御領中田畑ハ不<sub>ニ</sub>申及<sub>ニ</sub>百姓ノ居屋敷迄悉<sub>ニ</sub>大破流失……」。(「不鳴条」)

一六七六(延宝四)年「五月八日大雨、宇和・矢野・保内上田流失、その他流田甚だ多し」。

一七八二(天明二)年「五月四日風雨、御城下組・矢野組・保内組損田六反余、畑は一四〇町四反余」。(いずれ

も『御歴代事記』

一八六三(文久三)年「八幡浜浦宮ノ下及下道ト新地トノ人家去秋(文久三年)三度ノ洪水…中略」。(『龍山公記』)

一八八四(明治一七)年「八月二五日大暴風雨(台風)、農作物・船舶・人畜の被害劇甚」。(『八幡浜町誌』)。合田浦共修小学校流失。(『舌田小学校沿革』)

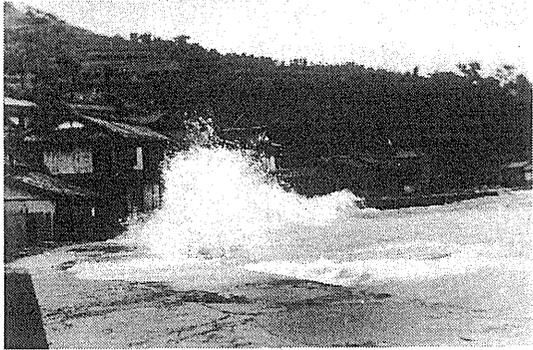
一九〇一(明治三四)年七月一日〜二五日豪雨、当地の降水量一五八ミリ。(『愛媛県史概説』下、以下同じ)  
一九一五(大正四)年九月八日台風、当地でも高潮のため、大黒町・新町・近江屋町一带浸水。

一九二〇(大正九)年六月二七日豪雨、当地・宇和島方面に集中被害。

一九二八(昭和三)年六月二五日〜二八日豪雨、大洲町・八幡浜町周辺は総降水量四〇〇ミリを越し、被害発生。

一九三四(昭和九)年九月二一日、室戸台風(六八〇ミリ)当地の雨量は一五〇ミリ。

一九四三(昭和一八)年七月二一日〜二四日、記録的な豪雨、七〇〇ミリを越す未曾有の豪雨となり、河川の堤防は各所で決壊した。家屋の倒壊・埋没・流失・浸水・田畑の流失など惨状を極めた。日土では喜木川が氾濫し、役場が流され、五反田川が元井橋から千畳の方に流れ、清滝橋が流失、千丈川も溢れ、今の新開町・木多町あたりを流し、昭和通り付近は一面の沼となった。古町・広瀬も軒先まで浸水、明治橋をこす水は橋の袂をえぐり、下流の橋はことごとく流失した。一方、波浪による海岸の被害甚しく、



台風15号(昭和29. 9. 26)小網代海岸

道路が決壊し、各所で寸断された。

一九四五(昭和二〇)年九月一五日〜一八日(枕崎台風)、出石寺・飯之山等の杉・松の大き木が多く吹き倒され、各地に被害がでた。

一九四九(昭和二四)年六月一七日〜二二日(デラ台風)、暴風雨波浪によって、大島の西側・佐田岬・町見等に被害があり、塩成沖に出漁中の日振島・戸島の漁民に多くの死者をだした。

一九五四(昭和二九)年九月二五日〜二六日台風一五号(洞爺丸台風)、高潮が大黒町一带を河のごとく流れ、ト口箱による堰ができた。床すれすれの浸水となり、新町・広瀬方面でも床下が浸水した。他にも被害が多くでた。

第二節 干害・雪害

柑橘の生産が多い当市では、台風について干ばつが大きな被害をもたらしている。代表的干ばつを次にあげる。

一九三四(昭和九)年七月二七日〜八月三〇日の雨量は、六ミリ(『愛媛県史概説』)で大干ばつとなり、農作物に大きな被害がでた。これは、六〇年来の大干ばつであった。

一九六七(昭和四二)年七月一三日から一〇月三日まで晴天続きで、雨量は、八月一ミリ、九月一〇・〇ミリ(消防署調べ)で井戸は枯れ、水道は時間給水、みかん農家は朝早くから水を運搬して灌水したが、枯死するのを食い止める程度で、大きい被害がでた。

長期間の積雪は、夏みかん・温州みかんにとって大敵で被害も大きい。主なものは次のとおりである。

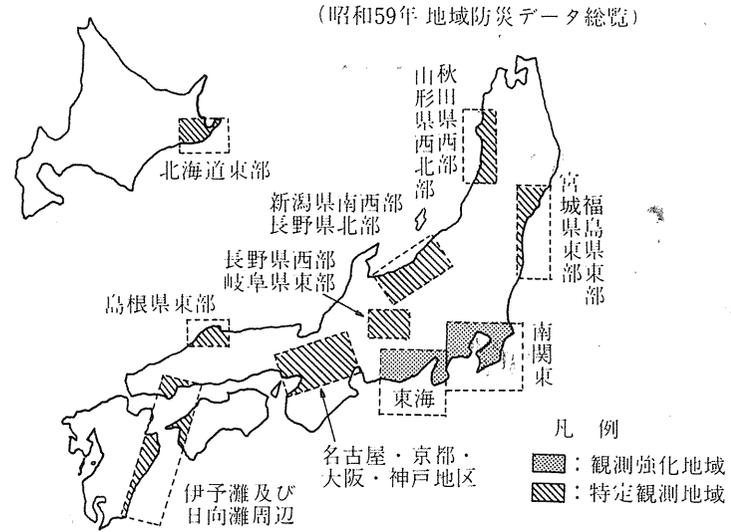
一九一七(大正六)年、前年の一二月から四月まで、積もっては消え、また積もる雪に閉じ込められ、薪もなくなり、春桑がだめになり、春蚕の掃き立てに困った。(日土、千丈)

当市付近の地震 (昭和61年理科年表)

日本 西暦	北緯 東経	M	地域・被害摘要
慶安2年2月5日 1649年3月17日	N 33.7° E 132.4°	7.1	宇和島石垣 116 間くずれ民家も破損
宝永4年10月7日 1707年10月28日	N 33.2° E 135.9°	8.4	五畿七道全体で被害甚大 土佐では 流家11,170 死1,844人 ○宝永地震(当市の状況は歴史編参照)
嘉永7年11月7日 1854年12月26日	N 33.4° E 132.1°	7.0	伊予西部、伊予大洲、吉田で壊家あり ○安政地震(当市の状況は歴史編参照)
昭和16年6月19日	N 32.6° E 132.1°	7.4	四国西海に津波があり波高1m
昭和21年12月21日	N 33.0° E 135.6°	8.1	○南海地震 当市壊家により一名死亡

江戸時代以降で、当地方に影響があったと考えられるマグニチュード七以上の地震は、次のとおりである。

特定観測地域と観測強化地域



日本列島は、全体が環太平洋地震帯(南北アメリカ大陸の西岸・アリューシャン列島・日本・フィリピン・ニュージーランドに至る太平洋を環状にとりまく地帯)であり、有史以来、多くの大地震が発生し、それによる被害も大であった。

このようなことから、わが国においても、一九六九(昭和四四)年に地震予知連絡会が設立され、大学や国立研究機関によって、地震予知に関する観測・研究が行われるようになり、全国的に観測網が整備されるようになった。当地方も、全国八か所の特定観測地域として指定され「伊予灘及び日向灘周辺」と命名されている。指定された理由は、この地域では、過去にマグニチュード(M)五程度の地震が発生しているからである。

一九三四(昭和九)年春、豪雪。日土で一日に六〇センチの積雪があり、川の水が凍ってしまった。  
一九六〇(昭和三五)年一二月から一月まで豪雪。  
一九六三(昭和三八)年一月九日から二七日まで積雪、柑橘に寒害が多くでた。

### 第三節 地震